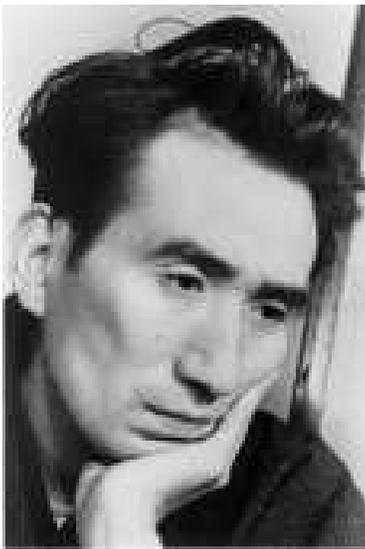




Book Talk

編集・発行 海南高校図書館
第11号 2012.01.24.

この100年余りで太宰治はどれだけの人間を魅了してきたのだろう。一昨^{さきおとし}年の2009年は太宰生誕100年にあたり、映画化された作品もいくつかあった（太宰治を演じた俳優で個人的歴代1位は生田斗真か）。それを機会に私の太宰好きが再燃した。



「好きな作家は誰ですか」と問われると「太宰治と村上春樹」と答えることにしている。「どちらのほうが好きですか」と難しい質問を重ねられることがある。そのときは迷いながらも「太宰治」と答えている。だって太宰は男前だから。彼は女性を口説くとき、「死ぬ気で恋愛してみないか」などという台詞を臆面もなく吐くような人だ。太宰治が大好きだ。

私が太宰に魅かれるのは、文章がきれいだからということもある。だいいちに、始まり方がいい。「言え言えほど、人は私を信じて呉れません」（『燈籠』）、「おわかれ致します。あなたは、嘘ばかりついていました」（『きりぎりす』）、「メロス^{メロス}は激怒した。必ず、かの邪知暴虐の王を除かなければならぬと決意した」（『走れメロス』）。また、文章にリズムがある。「死のうと思っていた。ことしの正月、よそから着物を一反もらった。お年玉としてである。着物の布地は麻であった。鼠色のこまかい縞目が織りこめられていた。これは夏に着る着物であろう。夏まで生きていようと思った」（『葉』）、「めちゃなことをしたい。思い切って、めちゃなことを、やってみよう」（『八十八夜』）。



そして、名言といって差し支えない文が作品中にあふれている。「人間は、恋と革命のために生まれて来たのだ」（『斜陽』）「戦闘、開始。いつまでも、悲しみに沈んでもおられなかった。私には、是非とも、戦いとらなければならぬものがあつた。新しい倫理。いいえ、そう言っても偽善めく。恋。それだけだ」（『斜陽』）。ぜひ声に出して読んでいただきたい。



太宰を語る時、人間と作品の間に線引きをするのが難しい。太宰を好きな理由がそのどちらにあるのかよくわからなくなる。男前だから、文章がきれいだから、加えてもうひとつ太宰の美点を挙げるとすれば、それは彼の持つ多面性である。明るさと暗さと、もうひとつ。彼の作品では、明るい部分は底抜けに明るい。『正義と微笑』『パンドラの匣』あ

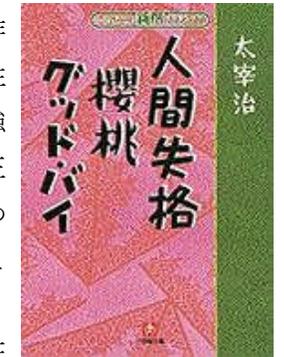
たりの登場人物は裏も表もなく明るい。非常に前向きな登場人物を持つ向日性は読者に活力を与える。特に勉強する意味がわからない高校生は『正義と微笑』を読むといい。夢を持つことの大切さがわかる。勉強することの貴さがわかる。

その反映だろうか、暗い作品は底なしに暗い。『人間失格』に表される彼の人間観・世界観は救いがない。『道化の華』をあわせて読むとあるいは救い（のようなもの）を感じられるかもしれない。感じられないかもしれない。

明暗をはっきり分かれているのだが、その間を取り持つ別の面を太宰は持っている。『斜陽』『ヴィヨンの妻』『おさん』に代表されるような作品だ。主人公の女性は強い。彼女たちの夫や恋人となる男性は弱い。彼らが地獄に片足もしくは両足を突っ込んだ生活をしているかたわら、彼女たちは自分の恋と革命がいつか必ず成就することを信じて光を発する。彼らはその光を受けてまぶしさに目がくらみ闇に救いを求める。魅力ある女性はその魅力ゆえに夫や恋人を遠ざけてしまうのだ。太宰はこの手のパラドクスがとても上手い。一体今読み終えたこの作品はハッピーエンディングだったのか否か。それを確かめたくて、読み終えたばかりの作品をまた最初から読んでしまうことさえあるくらいだ。そして再び明と暗を行き来しながらその間を慈しむ。

読書の優れた点のひとつは、一冊の同じ本から数え切れない様々な想いが生まれることである。それがどんな想いだったとしても、人の感情を揺さぶれば、それは太宰の意図したことだったのではないか。

一度東京三鷹にある禅林寺まで太宰のお墓を訪ねたことがある。それは夏休みのことだったので他には誰もいなかった。しかし毎年桜桃忌（太宰は誕生日と死体発見日が同じ6月19日であり、この日を彼の短編『桜桃』にちなんでこう呼ぶ）には、たくさんの人で沸き返るといふ。この100年余りで太宰治はどれだけの人間を魅了してきたのだろう。



■編集部より

禅林寺について太宰はこんな風書いている。（以下、三鷹市ホームページより抜粋）
「この寺の裏には、森鴎外の墓がある。どういうわけで、鴎外の墓がこんな東京府下の三鷹町にあるのか、私にはわからない。けれども、ここの墓所は清潔で、鴎外の文章の片影がある。私の汚い骨も、こんな小綺麗な墓地の片隅に埋められたら、死後の救いがあるかも知れないと、ひそかに甘い空想をした日も無いではなかったが、今はもう、気持ちが畏縮してしまっていて、そんな空想など雲散霧消した」（『花吹雪』）
その鴎外の墓の斜め前に、太宰治の墓がある。太宰の死後、美知子夫人が夫の気持ちを酌んでここに葬ったのである。第一回の桜桃忌が禅林寺で開かれたのは、太宰の死の翌年、昭和24年6月19日だった。6月19日に太宰の死体が発見され、奇しくもその日が太宰の39歳の誕生日にあたったことにちなむ。

掘先生（英語科）の熱情トーク なんてったって、太宰